

内地・その他

労苦体験手記

兵庫県 米重 愿

大正十五（一九二六）年九月十日、鹿児島県で出生、父喜之丞、母ツネの五男として、六人兄妹の末っ子として呱呱の声をあげた。

父喜之丞は国分町の尋常高等小学校に校長として奉職していた。当時修身教育はどの学校でも校長が教鞭を執っていたが、父は風邪をこじらせ、高熱を押して登校、教育時間中教壇で倒れ、四十六歳の若さで急性肺炎でこの世を去る。小生は生後十一カ月の何も分からない時である。今の時代なれば良い薬が幾らでも手

に入るが、当時は大正時代、医術も、薬の方もままならぬ、薬など漢方薬だけが頼りだったとか。その当時は寿命だと諦めていたのだろうかと思像するにはあまりにも悲しいことである。

その後、母は六人の子供を抱え、人には言えない苦勞を味わって我々を育ててくれた。世が世であれば、先生の奥様で楽な暮らしが出来たものを、悲運とは言え非情なものであったろう。

父は、生前教育者という立場で町の知名人だったらしく、ある友人から、衆議院議員に出馬するので選挙資金がどうしてもいるので何とかして欲しいと頼まれ、当時鹿児島無尽会社（相互銀行の前身、今はどこでも銀行名を使っている）で役員をしていた関係から保証人になってやったが、蓋を開けると友人は落選、

その日のうちに行方不明、トンズラであったそう。

その頃貴族院議員（現在の参議院）と衆議院とがあり、一般は昔から衆議院であった。貴族院は公卿、及び昔の大名、いわゆる殿様の子孫等であった。その友人のため父死すと同時に山、田畑、屋敷まで全部人手に渡り無一文となり、悲惨な生活を余儀なくさせられた。こんな時など親戚は当てにならない。一銭の援助も無かったそうである。母からはいつも口癖のように、将来どんな人になろうと保証人だけはなっていないと、こんこんと言われたものだ。それだけはこの年になっても守り続けている。長い人生なかなか出ないことだが母のたった一つの遺言と今でも思う。

末っ子の甘えん坊の小生も小学校に進むようになった。鹿兒島は昔から厳しい所で、年中裸足か、良い家の子でも藁草履で登校していた。洋服はその頃は無し、全生徒皆かすりの着物、カバンは母の手縫いのずだ袋だった。式の時はいずれも皆袴を履き、小学校三年生頃から霜降りの学生服を着るようになった。女の子は小さいまらまげ姿で、今では信じられない光景である。

ちょうどその頃、陸海軍の大演習が鹿兒島地方で行され、昭和天皇が行幸され、我が母校、宮内小学校の校庭には宮中の厩舎が出来、天皇陛下の御乗馬の「白雪号」はじめ三十頭ほどいたのだろうか。先生から、恐れ多いから近寄るなど言われたが、恐いもの見たさに、怒られるのを覚悟で見ていると、その乗馬の行儀の良いことと訓練の見事さは、人以上に賢いのに驚いた。それから三週間ばかり、大演習まで病みつきになって、朝から夕方まで宿題もせず見ている、人間より賢い動物がいるものだと思うようになった。

大演習当日、天皇陛下が母校近くの官弊大社鹿島神社にお参りになり、天皇陛下も下馬され、私はその参道に頭を下げてみると、長い革靴を履いた人が小生の前で立ち止まり、言葉は何も言わなかったが頭を撫せて行かれた。感無量で体が震えた。

先生はじめ同僚から「お前くらいな者だ」と言われ、一躍有名人になったことが今でも頭から離れない。あの頃は神様と思わない者はいなかった。家に帰り母に話すとビックリして、わが家で最高のご馳走を

してくれた。親子井である。その頃年に一度食べられるか否かであった。

そのうち、兄弟もそれぞれ仕事につき家計を助けてくれるようになった。小生も小学校高等科に進学、卒業すれば就職し、母に楽な暮らしをさせてやりたいと、その一念であった。高等科三年を卒業すると同時に国鉄に入り、門司鉄道教習所（現在の鉄道高校）で勉学に励む。全寮制のなかなか厳しい学校であり、毎日朝は五時起床、夜は消灯の九時までみっちりとしぼられた。入学した年の暮れの昭和十六（一九四一）年十二月八日、大東亜戦争が勃発、それからは学校でも軍事訓練が授業と半々に行われた。

戦局は日増しに激しくなりつつある中、そのうち、我々も行かざるを得まいと考えるようになった。ようやく教育の課程を卒業し、鹿児島鉄道管理部国分自動車区へ配属。バスの助手、また修理等をやりながら、昭和十九年六月には徴兵検査の通知が来た。検査場に行き、私は「年齢が間違いいはないですか」と検査官に言うが、通知をもらったからには受けよと命令さ

れ、在郷軍人会、婦人会、処女会等の見守る中受験、中種合格と宣告された。絶対服従で言い訳などは聞いてくれず「お前の役場が午を間違えているがこの時世だ、文句言うな」と一喝された。諦めるしかなかった。

その年の七月、福岡の自動車試験場で運転免許を取得する。さあこれからバスの運転手だと、大喜びしたのも束の間、十日も経たないのに一銭五厘のハガキで入営通知が来た。腹が立つやら情けないやらで夜も寝られず、残酷極まりないと、歯ぎしりしたが仕方がないと思ひ、これも御国のため、滅死奉公だと考え、その三日後、熊本県水俣の暁第一六七〇部隊に入隊した。

入隊当日はいろんな手続き等、古兵が優しくしてくれた。軍隊とはこんなものかと思いきや、「お前達は今日から陸軍船舶二等兵である。お前達の身に着けている軍装品は皆、恐れ多くも陛下がお貸しくださいました物である。絶対に粗末にすることは相ならん」と厳しい訓示である。翌日から起床と同時に左右の古兵六人

の世話、食事、演習、教練、手旗信号、海上訓練と日々休む間もない猛訓練の明け暮れであった。

三カ月の訓練、検閲を終え、陸軍一等兵に昇進、間もなく、我が部隊も南太平洋方面に出動する命令を受けた。日本海、東シナ海を南下することは分かっていたがどこへ行くのか見当がつかない。ダイハツ舟艇（上陸用）には七隻の舟艇を積んでいて、その舟艇は二人乗り組みで舟の先端に爆雷を抱え、敵艦へ全速八〇マイルで近づき、前方五〇〇メートルでエンジンストップ、その惰力によって敵艦にぶち当たり沈没せしめる。言うなれば人間爆雷艇である。戦況は著しく我が方に不利、元々海軍の仕事であるが海軍に任しておれぬと、陸軍が肩代わりした部隊である。戦艦「大和」が沈没し、いよいよ我々の出番になった。

着いた所は南西諸島の与論島であった。昼は艇に偽装網を覆い、山中に入り、午睡を取り夜間に行動。夜陰に乗じて沖繩近海にいる敵艦を攻撃する目的であったが、沖繩に向かって進行中、電信で解読されていたのか敵のグラマンに発見され、集中攻撃を受け、二基

のエンジンが共に十三ミリ機関砲でやられ漂流を余儀なくされた。

当時、沖繩近海は制海権、制空権ともに敵手中にあり、我が軍は防戦一方のようなもの、内地に敵が上陸するのを食い止める作戦であった。我が艇はゆっくりであるが浸水して来た。こうなれば沈没するまで待てと伍長殿が命令。四十分ぐらいでいよいよという時、戦友の一人が、制止も聞かずあわてて飛び込んだ。夜で暗い海の中、そこは人食い鯨のウヨウヨという所であった。戦友の大腿部を空中でくわえ、左右に振り回す。そして食いちぎり、海面一面は血に染まる。あつと言ふ間の出来事であった。

皆、雑囊から手榴弾を出しその海域に投げ込む。先程の戦友には申し訳ないが、その場はその方法しかなかった。十分ぐらいで艇は沈没、人食い鯨も手榴弾で死んだのか、元の静かな海になった。

完全武装のまま飛び込む。何時間経ったのか、東の空も白々として来た。二十数人沈黙のまま。海にただ浮いているだけ、助かるか死か、頭の中は何も浮か

ばない。夏とはいえ海の中では身体中が冷え切って感
触もなくなる。ちょうど太陽が赤々と輝きを見せた
頃、戦友の一人が船がこちらへ向かって来ると知らせ
た。もうこうなれば敵も味方も無い、ただ助かりたい
という気持ち先で、銃身に日の丸の旗をくくり必死
に振った。幸い海軍の掃海艇であった。「ありがとう、
ありがとう」と言うのだが声にならない。

艇に救われてから、海軍さん独自の精神棒で死ぬほ
ど腰を叩かれた。お陰で二十数人命拾いしたが、鹿兒
島霧島海軍病院へ一週間入院した。十二時間も海水に
浸かっていたら、引き揚げたとたんに安心してそこで
叩かねば死んでいたと海軍病院で聞いたが、腰が立た
ぬほどの痛さが残っていた。そのうち我々の部隊に連
絡がついたのか、原隊復帰の命が来た。退院を命ぜら
れ、熊本県水俣の原隊に復帰。伍長が中隊長に今まで
の経過を報告、各内務班に帰った。

帰った途端、懇ろにいたわってくれるどころか、

「お前らは死に場所の戦場に行きながらみすみす死に
損ないである、本日より食事当番を命ずる」と、帰っ

たのが不足そうに言われる始末。軍隊という所は、一
般には通用しないことがしばしばある。服従せざるを
得ないから泣き寝入りである。早速海に入り、麦罐、
飯盒を洗い、内務班（宿舎）に帰る寸前、敵のグラマ
ンが低空で約五〇〇機と、B 29、カーチス攻撃機が天
草と本上の間を轟音を響かせながら長崎方面へ通過し
て行く。それも今まで見たことのない大編隊であっ
た。

五分過ぎ、雷のような真つ白な閃光が走る。何だろ
うと思う間もなく、北西の空にドカンと、物凄い腹を
えぐるような音とキノコ雲が立ち上がる。キノコ雲は
紫色であった。時計を見ると午前十一時四十五分であ
る。近くの漁師たちが飛んで来て「兵隊さん、凄かつ
たですね、あれは新型爆弾ですか。日本本土の全土に
落とされたら、この狭い日本は焼け野原ですよ、今、
手を上げた方が良いと思いますよ」と言ってくる始
末。

こちらも大体想像はしているものの、「そんな事を
平気で言ったら、スパイ容疑で軍法会議でやられます

よ」と言っても平然と「どうぞ」とぬかした。もうその頃は分かっただけで、軍民言わずもがなという感じであった。その爆弾は原子爆弾であることが分かった。

先の漁師にこちらも憤然として着剣で脅すも、殺せるものなら殺してみろとあべこべである。同じ同胞と思ひ、こちらが手を引いた。

その日の夕刻、伝馬船で我々の部隊が駐屯する浜辺に続々と原爆症患者が到着。必死にその救助活動と介護をするが、瀕死の状態の人ばかりであった。軍医の指示で水を飲ますが、それっきり息絶えていく人ばかりであった。これだけの犠牲を強いなければ戦争は遂行出来ないのか、胸が張り裂ける思いだった。

その一週間後、我が織田部隊長より非常召集が掛かる。全部隊員を前に「只今より天皇陛下の玉音放送がある。取り乱しの無いように」と訓示を受ける。ある程度は分かっていたが、来るべきものが来たという感じで拝聴。部隊長はじめ全員号泣した。

我々は死を覚悟で絶対に勝つのだ、降伏なんか聞いたことが無い、今まで死線をさまよいここまでできたの

も、天皇陛下のため、日本の国のために戦ってきたのだ。アメリカ兵が上陸して来たら残る一兵まで戦うのだと言う者、いやいや、もう我々がどんなに思っても、あの玉音放送の通りだ、日本は完全に負けたのだと言う者、大混乱であった。

そして兵は、内務班で静かに待機していると部隊長から言われ、かつ下士官、士官は皆残れとのことで内務班で待った。「これで日本の国も敗戦の憂き目を見るんだ。男はアメリカ兵に金玉を抜かれ、女は女郎として慰め者で連合軍の兵隊達に提供されるのだ」と言うような流言飛語が、その頃から誰とは無しにささやかれるようになった。

古兵達は上官の制止も聞かず、アメリカ兵が来る前にサッサと帰ってしまった。今までは絶対服従でいたが、昨日まで思う存分我々を痛めつけ人間扱いしていないので我々が恐かったのだ。我々は血の気の多い兵ばかりで今までのお礼をさせてもらおうと、相談したものだ。

その後、我々三、四十人ほどに上官より「連合軍が

来て武器弾薬を引き取るまで、残務整理して欲しい」とのたつての頼みで、昭和二十年十一月にやっと解放され復員出来た。残った者は二百円の退職金をもらった。

入営当時とはうって変わり、帰路に着く姿は敗残兵そのものだったと、今振り返ると胸が熱くなる。一銭五厘のハガキで戦場に赴き、その代償なるものは何も無い。生死をさまよい、陸軍兵長のような肩書き、糞食らえた。

帰ってみると、ただ一つの心の支えだった母が亡くなっていった。これから楽させていこうという矢先、このショックはいかばかりか、三日間両親の眠る墓地で寝た。その頃は皆埋葬であったが、寂しい気持ちを少しでも和らげたかった。墓地と聞いただけで嫌がる人が多いがザワザワと賑やかな所である。

やや落ち着きを取り戻し、戦前からお世話になっていた国鉄へ戻ることにした。国鉄へ帰って聞いたのだが、留守を預かる長男の兄が、小生の軍役中、国鉄から月給をもらっていたそう。小生には一口も口にし

なかった。まあこんなことは余談であるが、恥をかけたのはこちらで、上司に平身低頭であった。けど国鉄とはそのころは官吏だったので有り難いことだったと思う。

今、つくづく考えるに、戦後ゆえに物資の入手もままならず、敗戦国の惨めさを痛いほど見せつけられた。涙ぐましい物語である。国鉄のバス輸送もままならず、バスの代わりにトラックの荷台に木製の椅子を並べ、無蓋のまま、雨でも降れば客は濡れ放題。それでも足が無いから文句一つ言わなかった。人権無視も甚だしい時代であった。

国鉄の給料は入営当時と全く変わらず、六十五円。指宿十二町にあった国鉄独身寮生活でサツマイモのつるの朝飯、昼飯は麦だけの握り飯、昼弁当の麦飯を朝の間に食べてしまい、寮母さんが「あんた、昼はどうするの」と言っっては心配してくれたが「腹が減ってハンドルが回せないと仕方無いからね」と言っって勤務につく。にわか仕立てのバスで旅客運送をする。国鉄も落ちたものだ。昼頃になると、腹がグウグウと鳴り

「こじき」同然、路線のオバサンに頼み込み、サツマイモとラッキョウを頂戴して何とか凌ぐが後が大変、山川駅より枕崎間を往復すれば、トラックは良く揺れ、オナラ責めである。出物腫れ物……と言うか遠慮も何もあつたものではない。

勤務を終えてからは指宿の港で、見様見真似で塩炊きして食費に当てる。今でいうアルバイトである。その頃はそういう事をするのが当たり前で、食べられずに死んだ人も大勢いた。だがこのままでは自分自身が惨めにさえ思ふようになった。

考えるに「この時を逃したら」と思い、いつまでも鉄道にこじきでいる訳にはいかないと判断、人生は後戻りが利かない。よし、一度は死んだ身体だ。同じかも分らないが、大都会なれば一人ぐらいどうにでもなるだろうと国鉄を退職し、イチカバチか、当たって砕けろの心意気で二週間後、ふらっと宛も無しに夜行列車に飛び乗った。車中でいろいろと考え、東京にしようか大阪かと迷いながら、いつしか三宮で降りた。そこで白々と夜明けである。

ホームより神戸市内を見れば、焼け野原である。ぼつんと立っているのは、大丸とそごう百貨店であることが後で分かった。時、昭和二十二年十一月三日である。神戸の第一歩であつた。

駅の改札口を一步出ると、待ち受けていたのは、駅の構内に溢れるばかりの復員兵である。田舎を出る時、一時的でもと思い、一升の白米を炊いて作った握り飯二十三個は全部彼らに盗られた。十一月とはいえよく冷え込んでいた。着る物だけは返してくれと頼むと、返してくれた。一人身だ、後は何とかなるだろうと諦める。駅にいた警察官も見ぬ振りしていた。天が我に与えた試練だ、と考え諦めがついた。

神戸に来たものの、西も東も分らないが、取りあえず止まり木が欲しい、国鉄の僅かな退職金ではそう長く続かないと判断し、木賃宿を探す。心良く泊めてくれた所が、なかなかの環境の所で、夜寝ると南京虫の総攻撃で寝られたものでは無かつた。朝になれば、小生の血を腹いっぱい吸った南京虫がごろごろと布団の上に転がっている。いつまでもここに居る訳にもい

かない。木賃宿を起点に何とか職探しである。

神戸駅の近くの職安で一週間、朝から夕方まで仕事探し。それも条件付きで住み込みの所を頼み込んだ。

一週間目である、トラックの運転手の口がある。「どうしますか？」と職安の職員から言われ、すがる思いで頼み込んだ。「住み込みだが一つ条件があります。月給一〇〇〇円だが保証人をつけること」と言われ「私は鹿児島から出てきて神戸には誰もおりませんが、何とか先方さんに職安のお力をお願いして頂けませんか」と懇願する。「仕事の上で間に合わないようでしたら、すぐでも辞めさせてもらっても文句は言いません、誓約致します」と話をしていると、中から所長が課長かというタイプの人が出て来て「私は宮崎の都城です、この所長です。先程より話を聞いていると他人事とは思われない。貴方は真面目そうだし、お困りだろうから、貴方という人物を信用して、私が保証人になってあげる」と言ってくださり、どうしようかと思案し迷っていた矢先、地獄で仏に会ったよう、世の中は助ける神もいるんだと思った。

船舶部隊の戦陣回想

愛知県 権田梅芳

昭和十七（一九四二）年徴兵検査、第二乙種合格。

昔から師範学校卒業は全員五カ月入隊。伍長で除隊し国民兵となり、戦争でも召集がなく、少国民教育に専念した。この時期に、永年にわたってアジア諸国を植民地にして搾取してきた欧米列強は、アジア人のアジア建設を主導する日本を封じ込めるため、我が国を経済封鎖し、石油・ゴム・鉄鋼石を禁輸して戦いを挑んで来た。存亡の危機に日本も止むなく臨戦体制となり、師範卒も、私ども十五年卒から普通兵となった。

同期生や村の若者が次々入隊し、切齒扼腕するうち七月に召集令状が届いた。長男だからと出征免除の師範へ進ませた周囲の願いもくまず、これで俺も一人前か、と単純に感激し、鯖江歩兵第一三六連隊に入隊した。